

日本鳞翅学会 中国支部会報

第8号 (2007年)



目次

支部長挨拶	1
第8回日本鱗翅学会中国支部例会	2
講演要旨	2
1. 恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ調査報告(2006) 概要 伊藤國彦, 難波通孝(岡山県恩原高原ウスイロヒョウモンモドキ特別委員会)	2
2. タカネヒカゲ(<i>Oeneis norna</i>)の分布と変異について 伊藤隆夫(広島大院・総合科学)	4
3. 韓国泰華山で採集したチョウ目 田村昭夫(鳥取県)	5
4. 早春のモンゴルに蝶を追う 吉田嘉男(岡山県), 武次房江(山口県), 中井衛(山口県)	7
5. キマダラモドキに関する最近の知見 神垣健司(広島県)	8
6. 山口県内の蝶類の動向(2006) 後藤和夫(山口県)	9
第8回日本鱗翅学会中国支部総会議事録等	11
お知らせとお願い	12
1. 支部助成金	12
2. 会員名簿等の取扱いと経費の節減について	12
3. 支部会報の原稿を募集しています	13
4. 寄贈図書等の紹介及び支部保管リスト	13
5. 第9回支部例会の開催について	13
2006年 中国支部役員連絡先	14
改正後支部規約(日本鱗翅学会中国支部規約)	14
編集後記	16

<表紙写真説明>

アカツメクサに訪花したクロシジミ *Niphanda fusca* ♂ 2006年7月22日撮影
山口県美東町秋吉台(後藤和夫)

支部長挨拶

支部会員の皆様方にはお元気でご活躍のことと拝察しております。

年が変わり寒に入っても冬らしくない日が続いて来ました。ウインタースポーツの代名詞であるスキーも雪が降らない年は大変な労力を強いられており、多くの場所でやむなく中止となったり、雪の祭典である雪祭りなどもトラックで雪を運び、溶けないようにと断熱材で養生をするなどその苦勞が報じられて来ました。四季のある日本に生まれその恩恵を受けて来ましたが、その中の一つ、冬が失われようとしております。これは大変な問題になるような気がしてなりません。

その様な中でこの冬に蝶を観てきたが、一、二月に確認してきた種を紹介してみたいと思います。始めに一月に観察した種として、ベニシジミ、モンキチョウ、ヒメアカタテハがあります。二月に観察した種にはモンキチョウ、モンシロチョウ、ウラナミシジミ、ヤマトシジミ、ヒメアカタテハがあります。それに幼虫としてツマグロヒョウモンですが、これは年末から一、二月中観察できました。越冬種ならともかく、この様な蝶が冬でも見られることは一昔前なら考えられなかったことです。お陰様で八重山にでも居るような気分で、冬でも楽しむことができましたが、これを素直に喜んでよいのかは大いに疑問が残ります。この支部会報を皆様に届けるころには、桜も開花し春の訪れと共に発生する1化性のギフチョウやコツバメ、ミヤマセセリなどに影響が出ないことを願うばかりです。

支部長として3年目に入りましたが、特別変わったことをしている訳ではなく、ただ組織の業務を停滞することなく遂行することが、一番大切なことだと当たり前のことを考えております。学会も半世紀以上が経過し支部会員の皆様方も一年経てば一歳年をとられ、往年の昆虫少年も気持ちと体力が一致しない年齢層の方が増えてきておられ、その反対に少ない40代前後の世代は日常の仕事に追われ、なかなかフィールドに出られないのが実態ではではないでしょうか。日常の業務も多様化しストレスの溜まる日々を過ごされている方もあるのではないのでしょうか。

趣味の世界でお互い好き勝手に行えば良いのかも知れませんが、組織の中の一人であれば、そうは言っても共有しているある一部のものは広く公表して、連帯感を深めてゆくことも大事なことに感じます。その様なことのできるものとして支部組織が存在し、年一度の支部例会が開催されているのではと思っています。支部例会が開催されてからの顔ぶれを拝見するに固定化されてきていると思うのは、皆様も同様ではないでしょうか。会社や役所などと違い強制出来ない世界ではありますが、せつかく自分の思いや成果を話せる場所が存在するのに、これを有効且つ効果的に活用する方法について一度初心に帰り、良い提案があれば意見を賜ればと考えております。

私はこの趣味の一番の楽しみは、初めて目的にした蝶の採集や長年の夢を叶えて国内から海外まで出かけ、我を忘れ思い切り蝶々を捕ることだと思っています。この夢があったから仕事にも専念出来、家族にある面迷惑を掛けたが、挫折することなくここまで過ごすことができたと思っています。これはこの趣味を志す方にとって共通すべき基本となっているものではないかと思います。そこから研究部門に題材として広く活用され、DNAの解析からその種が深く研究され科学的に真実に近づき、奥を極めるケースとか、生態系の更なる追求のため食草や環境を含め観察する分野、または新産地の分布を開拓する分野など多様の方面に別れていると見ています。最近の研究の例ではシルビアシジミの本土産と南西諸島産が種分けされたこと、キタキチョウとミナミキチョウのこと、少し古くはウラギンヒョウモンが3種に種分けされる研究など未だに多くの新知見が報告されております。

昨年白水隆先生の改訂版といえる図鑑が学研から発刊されました。亡き先生のお仕事としては終りになるものと思いますが、中味を拝読するにアマチュアが一番得意とするはずの分布図に多少の不備が見られ、編集の担当者の方と見直し修正を少し加えさせていただきました。これは県内外に当てはめて反省する必要がある、20年前ぐらいで既に日本の蝶類の分布を含めた調査は終了しているのではと、思い上がった節が少し感じられます。最近の知見としてスギタニルシジミの食樹にミズキが神奈川県調査から報告されたのはごく新しいことでした。また冒頭にも触れたように温暖化から、冬場でも蝶が羽化している現状など、新たな身近なテーマは目の前にころがっているようです。

まだまだ行うことの多さを感じるのは私だけではないと思いますが、2007年度の皆様方のご健康と多大な成果を祈念し、11月に予定する第9回支部例会に一人でも多くのご参加をお待ちしております。

第8回日本鱗翅学会中国支部例会

場 所：広島市中区 RCC 文化センター 日 時：2006 年 11 月 25 日（土）13 時～

《講演会参加者》計 20 名（敬称略・アイウエオ順）

支部会員	伊藤國彦, 伊藤寿, 金屋敷章裕, 神垣健司, 酒井彰, 白水房江, 田村昭夫, 中井衛, 難波通孝, 布目和子, 本田計一, 三宅誠治, 吉田嘉男, 若槻匡志, 渡辺一雄
非 会 員	伊藤隆夫, 守屋節男
事 務 局	後藤和夫, 伊藤靖子, 川元裕

《講演要旨》

1. 恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ調査報告（2006） 概要

伊藤 國彦・難波 通孝（岡山県恩原高原ウスイロヒョウモンモドキ特別委員会）

昨年に引き続き，調査，保護活動を実施したので報告する。

表 1^{*1}のごとく，7 月 4 日～7 月 29 日実施した成虫への標識再捕獲調査では，266 個体の標識と 72 個体の再捕獲をし，その結果から，本年度の推計総個体数は 1600 個体程度と推測した．表 2^{*2}は，調査地の概要（次ページ図）で示した調査区域（A～H）での標識場所と再捕獲場所及び再捕獲までの日数を示している。

結果からは，昨年同様 2 週間以上の成虫寿命を持つものもあり，平均的寿命は 10 日前後と思われる．移動距離についても，昨年同様 500m 程度の移動は可能であると類推される．

分布域については新産地などの追加には至らず，昨年発生認められた地域で成虫など未確認の場所もあり今後の保全活動の検討に幾つかの問題も投げかけた。

7 月 20 日から実施された，自然公園法指定動物として，当地のウスイロヒョウモンモドキの採集規制は，今後，本種の保護活動に有効に機能するのかどうか疑問もあるが，今後の行政の対応を見守りたい．なお生態面での新知見としては，生蛹の発見（1 事例のみ）があり，本種の蛹化場所推定についての貴重な糸口が得られた。

保護活動では，写真で示しているように，地元の人々の参加を得て，草刈りが実施された。

本年度の調査活動には昨年同様，黒田健二氏，東山睦己氏の全面的な協力を得たことを記し深く感謝するものである。

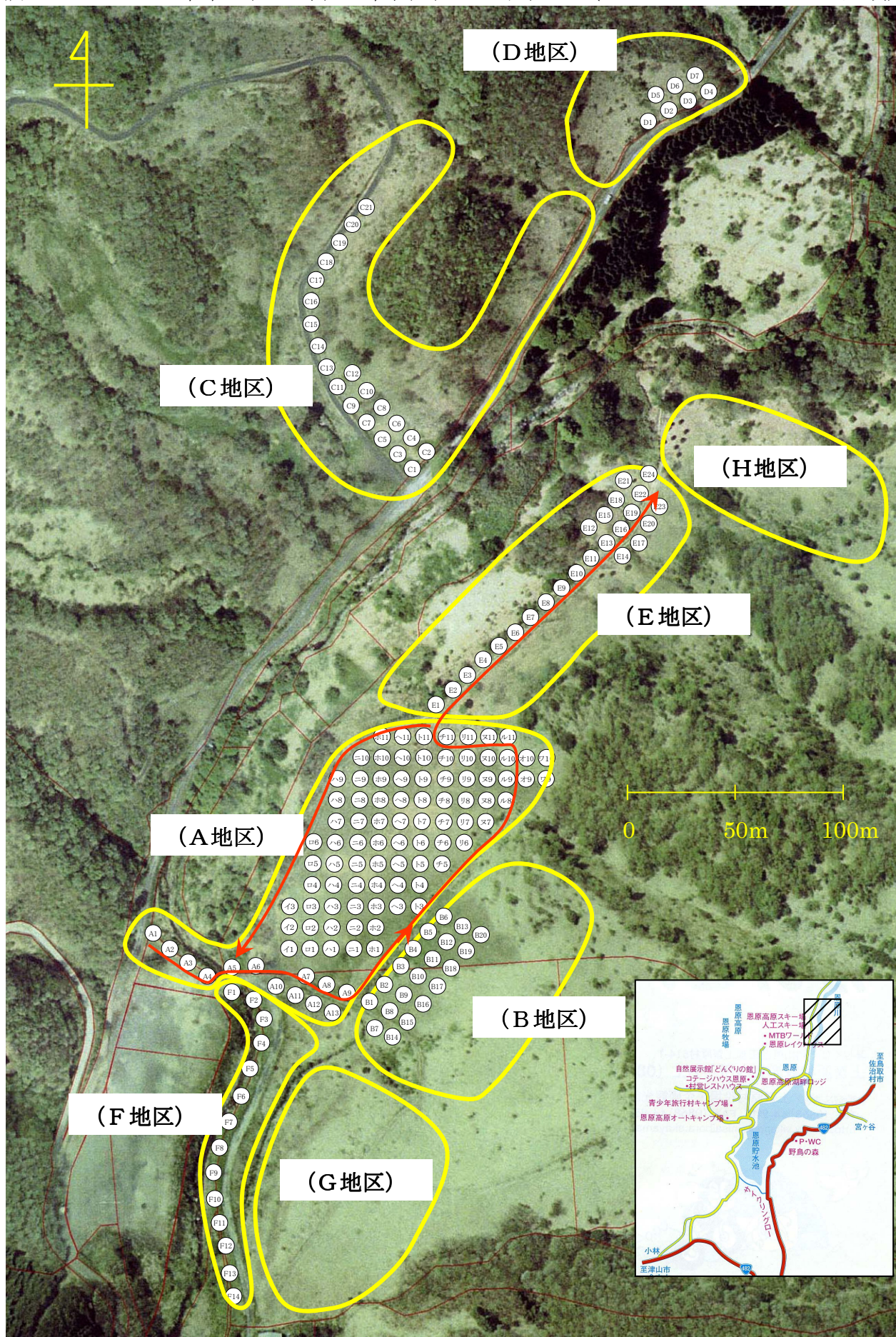
〔※1，2 は省略〕



地元住民によるウスイロヒョウモンモドキ生息地保護活動

図ー1 調査地の概要

調査地のポールの位置（2005年）と範囲（A～H地区）（ → ルートセンサス道順）



鏡野町（旧上齋原村）提供に加筆

2. タカネヒカゲ (*Oeneis norna*) の分布と変異について

伊藤 隆夫 (広島大院・総合科学)

*Oeneis*属のタクサに関しては依然として未解明の問題が多数残されている。これは1) 種間で互いに酷似しており、2) 種内変異が多く、3) 交尾器による種判定が困難で、4) 試料自体が得難いこと、が主な理由と考えられる。ここでは形態的に互いに酷似している*Oeneis norna*(タカネヒカゲ)、*O. polixenes*、*O. bore*、*O. melissa*(ダイセツタカネヒカゲ)の4種間の関係と分子遺伝学的距離の程度をmtDNA(ND1)452bpから調べた結果を示す。試料は、*norna*に関しては環境省の許可を得て捕獲した飛騨山脈の個体(環中部許280号平成13年度)を使用した。*melissa*に関しては筆者がコロラド大学客員教授在任中にロッキー山脈(採集規制地域以外)で捕獲した個体を使用した。*polixenes*と*bore*のデータはMartinらの結果をDDBJデータベースから引用した。

mtDNA(ND1)452bpの解析から次のことが示された。1) 452bpの内、*norna*は*polixenes*、*bore*、*melissa*と各13bp異なり、一方*polixenes*は*bore*と12bp異なる。2) *norna*、*polixenes*、*bore*、*melissa*間の木村の二パラメータ法による相対的分子遺伝学的距離はほぼ同じで0.02~0.03である。以上からこれら4種は比較的最近(おそらく10⁶年程度)のほぼ同時代に分離されたものと推定される。*polixenes*、*bore*、*melissa*は新大陸では部分的に同所的に分布し、これらは個々が明瞭な独立種として取扱われている。*norna*、*bore*、*melissa*は旧大陸では部分的に同所的に分布し、これらも個々が明瞭な独立種として取扱われている。日本では*norna*と*polixenes*が同種と考えられていた傾向があったが、*polixenes*と*norna*は他のタカネヒカゲ属種間と同程度の差のある別種であることがmtDNA(ND1)452bpから示唆された。

1988年に北米で*polixenes*に酷似した種*philipi*が*polixenes*から分離記載され、更に1998年には*philipi*が極東種の*rosovi*と同種として取扱われている(すなわち*O. philipi*が*O. rosovi philipi*になった)。更にまたLukhtanovら(2001年)によると*norna*と*philipi*の♂交尾器には差が見られないという。従って、将来*rosovi*、*philipi*、*norna*が同種として扱われる可能性は残されているが、現在の所*philipi*と*norna*は別種として扱われているので、*philipi*と*norna*が同種であると証明されない限り*norna*は新大陸には分布していないと結論される。これは主に1975年以降に日本で出版された多数の図鑑の記述と矛盾する(*philipi*が発見されたのは1988年!)。

1) 飛騨山脈産個体

(1) 筆者は飛騨山脈産が二亜種には分けられないこと、北部群と南部群に分けられ、その境界は南沢岳と布引岳の間にある事を1976と1979年に定量的に示した。この北部群と南部群に別れた理由は立山の約20万年前に始まった火山活動と関係しているものと推定される。従って、少なくとも20万年以前には本種は飛騨山脈に分布していたと推定される(日本への侵入は勿論それ以前)。

(2) 白馬岳周辺の個体に関しては白馬岳本体周辺(旭岳など)が最も暗く、清水岳では明るく、白馬乗鞍岳、鉢岳でも若干明るくなる。

2) 八ヶ岳産個体

八ヶ岳産個体の塩基配列データに関してはUsamiらのmtDNA/ND5の報告があり、これによると352 bp中1~2bpが*asamana*と異なっている。この塩基置換の程度は例えばギフチョウの地域変異の置換の程度に近く、これは八ヶ岳産個体が*asamana*と亜種関係にあることへの間接的支持となっていると考えられる。

(1) 八ヶ岳では元来3箇所にA、B、Cのコロニーが存在していたが、1970~80年前後にその内のコロニーBは消滅した。現在残存している、AとCのコロニーの内Aの生息個体数は約200個体で、Cの個体数は不明である。

(2) 八ヶ岳産の個体は良く歩行し、静止することが多い。交尾は白馬岳産の個体のように尾根筋で♂が♀を探すことはしないで、斜面底部で交尾行動を起こす。従って、尾根筋に成虫が出現する機会はほとんど無い。

(3) 八ヶ岳産の個体の発生時期に関しては1970年頃までの記録は7月下旬~8月上旬であるが、それ以降は7月中旬~7月下旬とやや早まった。これは他種でも同様の傾向にあるが、地球温暖化によると考えられる。

(4) 八ヶ岳は約130万年前から火山活動を始め、約20万年前にはほぼ収束したことから、この間に本種が侵入したと推定される。なお、八ヶ岳には戦前雷鳥が生息していたが、絶滅した。

試料は、*asamana*に関しては主に環境省の許可を得て捕獲した個体と発表者が1974年以前に捕獲した個体を使用した。 *sugitanii*に関しては主に長野県知事，長野県教育委員会，林野庁の許可を得て捕獲した個体と科博の林慶コレクションを利用した。 分布変遷，形態，行動様式の調査は1966～2001年に行った。

謝辞：mtDNA解析にあたり渡邊一雄氏（現広島大名誉）に援助を受けた。

文献：Usami, S. ら, DDBJ, AB107892, AB107893 (2003), 伊藤隆夫, 昆虫と自然, 10(1975)6, *ibid.* 14 (1979)20, Martin et al. *Molec. Phy. Evol.* 15(2000)70. Lukhatanov et al, *Catalogue of the genera Oeneis and Davidina* (2001)Germany.

3. 韓国泰華山で採集したチョウ目

田村 昭夫（鳥取県）

・2006年6月23～25日まで大韓民国京畿道廣州市泰華山（Mt. Taehwasan—N37° 18' 35", E127° 18' 23", 一番上の灯火採集地点の標高が264m）ソウル大学演習林で行われた日本蛾類学会主催・採集例会「第37回みくに会」に参加した。

・今回の「みくに会」は，韓国昆虫分類研究会との日韓合同ワークショップとして行われた。整理が終わったチョウ目について報告する。

・僅か2泊3日であったが，チョウ目は17科87種（チョウ34種，ガ53種）を採集することができた。採集した昆虫の殆どは，鳥取県あるいは近隣地域に生息している種である。このうち，鳥取県周辺との共通種は，57種約66%（チョウ23種約68%，ガ34種約64%）であった。鳥取県のガ類の整理をすすめれば，共通種の割合はもっと高くなるであろう。日韓の昆虫相の関係は深いと実感するとともに，鳥取県周辺の昆虫をもっと理解する必要性を感じた。

・同定をするに当たり，韓国産のチョウは金（2002）で行った。韓国産蝶類の和名は松田（1999）に従った。種の配列は白水（2006）を参考にした。ガの同定に当たっては，井上ら（1982）を使用した。不明な種については，佐藤力夫氏と間野隆裕氏に同定して頂いた。学名は，List-MJ 日本産蛾類総目録に従い，種の配列は参考にした。大陸にはウラグロホシミスジ（*Neptis andetria*）という種がいる（白水，2006）。そこで藤岡（1998），福田ら（1999）を参考に同定した結果，今回採集したホシミスジは全てホシミスジ（*Neptis pryori*）であった。

・ホシミスジについて有益な助言をいただいた淀江賢一郎氏，ガの同定をして頂いた佐藤力夫氏と間野隆裕氏には，記して感謝の意を表す。

参考・引用文献

藤岡知夫（1998）世界のホシミスジの地理的変異—2新亜種の記載を含む—。ホシザキグリーン財団研究報告2，263-274。

福田晴夫・美ノ谷憲久・高橋真弓（1999）ホシミスジを考える（2）大陸産ホシミスジは1種ではない。蝶と蛾50（3），129-144。

井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛・大和田守（1982）日本産蛾類大図鑑。講談社（東京），966pp.，552 pp.

神保宇嗣（2004-2006）日本産蛾類総目録。 <http://listmj.mothprog.com/>

金 容植（2002）原色韓国蝶類圖鑑（2002）。教學社（韓国），305pp.

松田真平（1999）朝鮮半島産蝶類（含む北朝鮮産）の韓国名について—申裕恒氏の蝶リストを読解— The list of Korean butterflies. やどりが（182），12-23。

白水 隆（2006）日本産蝶類標準図鑑。学習研究社（東京），336pp.

韓国桑葉山蟻蛾類採集記録

No.	学名	和名	個体数	鳥取県近辺
アガハチヨウ科				
1	<i>Papilio xuthus</i> Linnaeus, 1767	ナミアダハ	2♂	○
2	<i>Papilio maackii</i> Menetries, 1858	ミヤマカラスアダハ	2♂	○
シロチョウ科				
1	<i>Colias erate</i> poligraphus Moischulsky, 1860	モンキチヨウ	1♂1♀	○
2	<i>Pieris rapae crucivora</i> Boisduval, 1836	モンシロチョウ	2♂1♀	○
3	<i>Pieris canidia taialicola</i> (Byrk, 1946)	タイワンモンシロチョウ	3♂3♀	○
4	<i>Pieris melale</i> (Menetries, 1857)	スジダシロシチョウ	4♂2♀	○
5	<i>Pieris napi dulcinea</i> (Butler, 1882)	エンスジダシロシチョウ	3♂1♀	
シジミチョウ科				
1	<i>Coreonia raphaellis</i> (Oberthür, 1880)	チョウセンアカシジミ	1♂	
2	<i>Ussuriana michaelis</i> (Oberthür, 1880)	コンゴウシジミ	2♂2♀	
3	<i>Japanica lutea</i> (Hewitson, 1865)	アカシジミ	1♀	○
4	<i>Japanica saepistrata</i> (Hewitson, 1865)	ウラナミアアカシジミ	1♀	○
5	<i>Anigius bulteri</i> (Fenton, 1882)	ウスイロオナガシジミ	1♀	○
6	<i>Favonius orientalis</i> (Murray 1875)	オオミドリシジミ	6♂	○
7	<i>Favonius taxila</i> (Bremer, 1861)	ジョウワヤシミドリシジミ	22♂	○
8	<i>Favonius yuasai</i> Shirou, 1947	クロミドリシジミ	2♂	○
9	<i>Chrysocephyrus brilliantinus</i> (Staudinger, 1887)	アイノミドリシジミ	2♂	○
10	<i>Rapala caerulea</i> (Bremer et Grey, 1852)	アカトラフシジミ	1♀	
11	<i>Celastrina argiolus ladonides</i> (de l' Orza, 1869)	ルリシジミ	1♂2♀	○
タテハチヨウ科				
1	<i>Libythea celtis celthoides</i> Fruhstorfer, 1908	テングチヨウ	2♂	○
2	<i>Polygonia c-aureum</i> (Linnaeus, 1758)	キタテハ	2♀	○
3	<i>Argyrogonne laodice</i> (Pallas, 1771)	ウラギンスジヒョウモン	1♂	○
4	<i>Argyrogonne rustana</i> (Moischulsky, 1866)	オオウラギンスジヒョウモン	2♂1♀	○
5	<i>Nepitis abthina</i> (Bremer et Gre, 1853)	オオミスジ	1♂	
6	<i>Nepitis pyret</i> Butler, 1871	ホシミスジ	13♂3♀	○
7	<i>Nepitis sappho intermedia</i> W.B.Peyer, 1877	コムスジ	2♂	○
8	<i>Limenitis camilla japonica</i> Menetries, 1857	イチモンジチョウ	2♂	○
9	<i>Limenitis doerriesi chowsensis</i> Matsumura, 1929	デーリスイチモンジ	2♂1♀	
10	<i>Limenitis sydyi talefasciata</i> Menetries, 1859	ヒロオビイチモンジ	1♂	
11	<i>Aldania raddei</i> (Bremer, 1861)	スジダシミスジ	1♀	
12	<i>Kaniska canace</i> (Linnaeus, 1763)	ルリタテハ	1♂	○
13	<i>Kiritia fentoni</i> (Butler, 1877)	キマダラモドキ	1♂	○
14	<i>Melanargia epimede</i> (Staudinger, 1892)	ミカヅキシロジャノメ	1♂	
セセリチョウ科				
1	<i>Damio tethys</i> (Menetries, 1857)	ダイミョウセセリ	2♂1♀	○
2	<i>Lobocla bifasciata</i> (Bremer et Grey, 1853)	マエキセセリ	2♂3♀	
ツトガ科ーノメイガ亜科				
1	<i>Glyphodes perspectalis</i> (Walker, 1859)	ツノメイガ	2♂	○
カギバガ科ーカギバガ亜科				
1	<i>Salix harpagula</i> (Esper, 1786)	ウスオビカギバ	1♂	
トガリバガ科				
1	<i>Tethea consimilis</i> (Warren, 1912)	オオマエベニトガリバ	1♂	○
シヤクガ科ーホシヤク亜科				
1	<i>Naxa sericiaria</i> (Moischulsky, 1866)	ホシヤク	3♂1♀	○
シヤクガ科ーアオシヤク亜科				
2	<i>Geometra disclamani</i> Graeser, 1889	カギシロスジアオシヤク	1♂	○
3	<i>Geometra ussuriensis</i> (Sauber, 1915)	マエモンシロスジアオシヤク	1♀	
シヤクガ科ーヒメシヤク亜科				
4	<i>Problepsis eucrona</i> Prout, 1913	ツシマオオシロヒメシヤク	1♂	
シヤクガ科ーナミシヤク亜科				
5	<i>Gandaritis whiteley</i> (Butler, 1878)	ツマキシロナミシヤク	1♂1♀	○
6	<i>Callabraxas composita</i> (Guenee, 1857)	ナミカタシロナミシヤク	2♂	
7	<i>Gandaritis fisseni</i> (Bremer, 1864)	キマダラオオナミシヤク	3♂	○
8	<i>Gandaritis agnes</i> (Butler, 1878)	キガシラオオナミシヤク	1♀	○
9	<i>Callabraxas fabiolaria</i> (Oberthür, 1884)		1♀	
10	<i>Eulithis ledereri</i> (Bremer, 1864)	ウストビモンナミシヤク	1♂	○

No.	学名	和名	個体数	鳥取県近辺
シヤクガ科ーエダシヤク亜科				
11	<i>Cystidia truncatula</i> Wehrli, 1933	ヒロオビトンボエダシヤク	1♂	○
12	<i>Purectropis nigroparsa</i> (Wileman et South, 1923)		3♂1♀	
13	<i>Paraperia griffithi</i> (Guenee, 1857)	オオゴマダラエダシヤク	2♀	○
14	<i>Archanna melanaria askoldnaria</i> (Oberthür, 1880)	キンタエダシヤク	2♂2♀	○
15	<i>Jankovskia fuscaria</i> (Leech, 1891)	チャノウンモンエダシヤク	2♀	
16	<i>Xanthrames dholaria</i> Moore, 1868	ヒロオビオオエダシヤク	2♂	○
17	<i>Angerona primaria</i> (Linnaeus, 1758)	スモエダシヤク	2♂	○
18	<i>Philonandria emaria</i> (Bremer, 1864)	エノウスクモエダシヤク	1♀	
19	<i>Epholca arenosa</i> (Butler, 1878)	サラサエダシヤク	2♀	○
20	<i>Fascellina chromataria</i> Walker, 1860	エダリエダシヤク	1♂	○
カレンガ科				
1	<i>Gastropacha populifolia</i> (Esper, 1783)	ホシカレンハ	1♂	○
イボダガ科				
1		クロイボダガ	2♂	
スズメガ科ースズメガ亜科				
1	<i>Dolbina tancrei</i> Staudinger, 1887	サザナミスズメ	1♂	○
スズメガ科ーホウジャク亜科				
2	<i>Ampelephaga rubiginosa</i> Bremer & Grey, 1853	クルマスズメ	4♂	○
3	<i>Rhagastis mongollana</i> (Butler, 1875)	ピロードスズメ	2♂	○
4	<i>Acosmeryx naga</i> (Moore, 1858)	ハネナガブドウスズメ	2♂2♀	○
シヤチホコガ科				
1	<i>Harpyia umbrosa</i> (Staudinger, 1892)	ギンシヤチホコ	1♀	○
2	<i>Rabiala cristata</i> (Butler, 1877)	セダシヤチホコ	1♂	
3	<i>Peridea gigantea</i> Butler, 1877	ナカキシヤチホコ	1♀	○
4	<i>Synpistis japonica</i> (Nakatani, 1981) ?	アオシヤチホコ?	1♂1♀	○
ドクガ科				
1	<i>Acronis album</i> (Bremer, 1861)	ツシマシロドクガ	2♂1♀	
2	<i>Pida nipionis</i> (Butler, 1881)	クロモンドクガ	1♀	○
ヒトリガ科ーコケガ亜科				
1	<i>Macrobrechis standingeri</i> (Alphéraky, 1897)	クビワウスグロホソバ	1♂	○
2	<i>Agrisius fuliginosus</i> Moore, 1872	ゴマフオオホソバ	1♀	○
3	<i>Bursine striata</i> (Bremer & Grey, 1853)	スズベニコケガ	1♂2♀	○
4	<i>Bursine nuchra</i> Butler, 1877	ゴマダラベニコケガ	1♂1♀	
ヤガ科ーケンモンヤガ亜科				
1	<i>Moma tsushimaana</i> Sugli, 1982	ツシマゴマケンモン	1♂	
ヤガ科ーヨトウガ亜科				
2	<i>Cosmia</i> sp.	キリガの一種	1♀	
ヤガ科ーカラスヨトウ亜科				
3	<i>Cosmia campostigma</i> (Ménétriér s, 1859)	シラオビキリガ	1♂1♀	
ヤガ科ーリンガ亜科				
4	<i>Pseudopsis prasinianus</i> (Linnaeus, 1758)	アオスジアオリンガ	1♀	○
ヤガ科ーシタバガ亜科				
5	<i>Catocala streckeri</i> Staudinger, 1888	アサマキシタバ	4♂5♀	
6	<i>Dysgonia mandschurica</i> (Staudinger, 1892)	タイリクアシブトクチバ	1♂	
7	<i>Mocis undata</i> (Fabricius, 1775)	オオウンモンクチバ	1♂	
8	<i>Spirama retorta</i> (Clerck, 1759)	オスグロトモエ	2♂	○
9	<i>Lagoptera luno</i> (Dalman, 1823)	ムクダコノハ	1♂	○
ヤガ科ークチバ亜科				
10	<i>Chrysorithrum amatum</i> (Bremer et Grey, 1853)	カクモンキシタバ	1♂3♀	○
11	<i>Synpoides fumosus</i> (Butler, 1877)	クロシラフクチバ	7♂2♀	○
12	<i>Naganoella timandra</i> (Alphéraky, 1897)	ベニトガリアツバ	1♂	
ヤガ科ークルマツバ亜科				
13	<i>Edessena humada</i> (Felder et Rogenhofer, 1874)	オオシラホシアツバ	1♂1♀	○
トラガ科				
1	<i>Sarbanissa venusta</i> (Leech, 1889))	ベニモントラガ	1♀	○

34/53=64%
17科87種 57/87=66%

4. 早春のモンゴルに蝶を追う

吉田 嘉男（岡山県）・武次 房江（山口県）・中井 衛（山口県）

2003 年、2004 年は蝶の最盛期である夏に調査してきたが、2006 年はウランバートル周辺に的を絞り、早春にしか見られないテネディウスウスバシロチョウ、アサヒヒョウモン、ミドリコツバメ、ニセコツバメ、タカネヒカゲ類、ギンスジヒカゲ類等々を目標に、モンゴル行きを計画した。

1. 日程

2006 年 6 月 3 日～6 月 14 日まで、テレルジ、ヌフト山、ボグド山、バヤンチャンドマン、デュガンハットを調査した。

2. 調査結果

今年のモンゴルは日本と同様に寒く春は 2 週間くらい遅れ、ウランバートル周辺の高い山にはまだ残雪が見られた。夏の草原を見慣れた我々には早春の草原はまだ芽生えたばかりで草花も少なく殺風景であった。それでも三寸アヤメが咲き始め、オキナグサやスミレの紫や黄色の花が見られた。ウルダタカネヒカゲは何処の調査地でも見られた。帰る頃には緑も濃くなり花も見られ、後 2～3 日採集したかった。残念ながらテネディウスは見ることも出来なかったが、幼虫を含め 30 種採集した。モンゴルでの採集は、'03 年の 86 種に '04 年の 52 種と '06 年の 8 種（下線あり）を追加し合計 146 種となった。

セセリチョウ科；ギンモンキマダラセセリ，コウアンチャマダラセセリ，チャマダラセセリ，ヒメチャマダラセセリ，カラフトタカネキマダラセセリ

アゲハチョウ科；キアゲハ，*P. Nomion* の幼虫

シロチョウ科；アムールモンキチョウ，エゾスジグロシロチョウ，エゾヒメシロチョウ，シナピスヒメシロチョウ，ヒメシロチョウ，モンシロチョウ，エゾシロチョウの幼虫と蛹

シジミチョウ科；カバイロシジミ，クロツバメシジミ，コアオシジミ，ジョウザンシジミ，ツバメシジミ，ニセコツバメ，ムラサキベニシジミ，ルリシジミ

タテハチョウ科；アサヒヒョウモン，ミヤマヒョウモン，シータテハ，チョウセンヒョウモンモドキの幼虫

ジャノメチョウ科；ウルダタカネヒカゲ，チビタカネヒカゲ，ナンナタカネヒカゲ，ドールニギンスジヒカゲ

3. 採集状況

《6/4～6/6 晴れ テレルジ周辺》

天気はよいが気温が低く風があり蝶は少ない。テネディウスはガレ場にいると聞いて捜したが見あたらな。タカネヒカゲ類は風の当たらない、日だまりとなる岩陰や窪地、水のない谷筋に集まっていた。武次は岩陰でハエのように飛ぶギンモンキマダラセセリと灌木林の中でアサヒヒョウモンを採集した。*nomion* やヒョウモンモドキの仲間の幼虫を採集していた。

《6/7 ボグド山》

天気は良かったが寒く *nomion* の幼虫を撮影しただけでホテルに戻る。6/8 アクシデントで迎えの車が遅れた。気温も上がりヌフト山を調査、チャマダラセセリ、ムラサキベニシジミ、ドールニギンスジヒカゲ、ウルダタカネヒカゲが、又、夥しい数のエゾシロチョウの幼虫がいた。

《6/9 デュガンハット（バヤンチャンドマンの近く）》

今日は最高の天気、キャンプ近くの林と草原の境に行き、林縁にはニセコツバメ、ムラサキベニシジミ、ルリシジミ、カバイロシジミが更にエゾヒメシロチョウ、シナピスヒメシロチョウ、ヒメシロチョウの 3 種が混生していた。少し移動し、ヒメチャマダラセセリ、クロツバメシジミ、ウルダタカネヒカゲ、チビタカネヒカゲ、ドールニギンスジヒカゲと一番の収穫。6/10 バヤンチャンドマン；晴

れ気温も上がり谷筋のブッシュの中ではニセコツバメが沢山見られ交尾もしていた。湿った地道ではムラサキベニシジミ、チャマダラセセリ、ルリシジミが吸水している。中井はカラフトタカネキマダラセセリを採集した。吉田は三寸アヤメの群落を通り、谷筋を山に登ると日だまりでコアオシジミ、ニセコツバメ、エゾヒメシロチョウがいる。又、アムールモンキチョウの蝶道にもなり待ち受けて採集した。谷筋を出た斜面でキアゲハを採集、岩陰でタカネヒカゲ類を採集していると突然の雷鳴、空を見上げると真っ黒、慌てて車に帰る。間一髪ずぶ濡れに成らずにすんだ。採集を諦めテレルジに戻る。

《6/11》

曇り気温が低く雨、ウランバートルに買い物に行く。

《6/12》

最後のテレルジはアサヒヒョウモンの居る谷を調査したが、アサヒヒョウモンは擦れていた。

《6/13》

モンゴル最後の調査はヌフト山で天気も良く谷筋ではギンモンキマダラセセリ、ジョウザンシジミ、ムラサキベニシジミ、チャマダラセセリ、タカネヒカゲ類とエゾシロチョウの蛹を中井は見つけた。武次は毎日展翅を遅くまで行っていた。夜は帰国のため遅くまで荷物の整理を行った。

《6/14》

早朝ヌフトホテルを発ち、成田、羽田を經由シタ方には家に着いた。



2006. 6. 13 ヒロタキャンプにて



2006. 6. 10 ニセコツバメの交尾

5. キマダラモドキに関する最近の知見

神垣 健司（広島県）

1. キマダラモドキとクロキマダラモドキ

キマダラモドキ属はユーラシア大陸の冷温帯を中心に分布する5種で構成された一群で、東アジアにきわめて近縁なキマダラモドキ *Kirinia fentoni* とクロキマダラモドキ *Kirinia epimenides* の2種が分布し、両種は大陸の多くの地域で混棲している。

生息域はある程度の棲み分けがあるようだが、韓国などでは全く同じ場所に混生していることを観察している。こうした極めて近縁な2種が、いかにしてニッチを確保しているかについて私見を紹介する。

（形態的な相違）

キマダラモドキとクロキマダラモドキの成虫の形態面での違いは下記のとおりであるが、その差

は軽微である。

- ・翅形はキマダラモドキの方が丸みを帯びている。
- ・触覚の先端にあたる棍棒部 (club) は、クロキマダラモドキが著しく黒化しているのに対し、キマダラモドキは節の縁部のみの黒化にとどまっている。
- ・翅裏面の褐色条は、キマダラモドキがやや黄色みを帯びている。
- ・後翅裏面第4室基方の褐色条は、クロキマダラモドキでは他の黒条に比べて太くなるが、キマダラモドキは太くならない。



↑ キマダラモドキ (呉市)



↑ クロキマダラモドキ (韓国)

雄外部生殖器では、次のような有意差が認められる。①tegumen 背縁の形状はキマダラモドキがなだらかな斜面状であるのに対し、クロキマダラモドキは台形状となる、②uncus はクロキマダラモドキがより長く、太さが増す部位もより基部に近い、③brachium はクロキマダラモドキがより短い、④クロキマダラモドキの valva 背面背縁に数個の微突起を有する。

また、クロキマダラモドキの幼生期はこれまで未知であったが、今年になって浅野隆氏によって中国産クロキマダラモドキ幼生期が紹介された。また筆者も未発表であるが、ロシア産のクロキマダラモドキ幼生期を観察している。その結果、キマダラモドキとクロキマダラモドキの幼生期はほとんど違いがないことが判明した。

2. 広島県のキマダラモドキの現状

広島県では呉市東南部に限って分布し、その分布域は蒲刈諸島など島嶼部にも及んでいる。近年、島嶼部でも個体数が減少傾向にある中、呉市郷原町(賀茂台地南部)に分布域が広がり、2006年には東広島市でも生息が確認された。一方、休山や灰ヶ峰南部などの呉市西部でも新たに生息が確認されている。一見、温暖化が影響しているようにも思えるが、具体的な検証はこれからである。2003年に下蒲刈島・大平山山頂で森林整備が行われたが、翌年この山頂部で多数のキマダラモドキが確認できた。このように森の整備がキマダラモドキ生息の大きな鍵を握っている可能性が高い。

6. 山口県内の蝶類の動向 (2006)

後藤 和夫 (山口県)

1. 新たに分布を更新した種など

- ・ウラゴマダラシジミ *Artopoetes pryeri* (Murray, 1873)

2005年度から注目していた種で、2006年6月に瀬戸内海に面する上関町と柳井市の境界部に位置する皇座山(527m)の上関町側で生息地を確認する。この発見はこれまで確認していた内陸部から大幅に南限を更新することになり、今後、瀬戸内側から新たな生息地が見つかる可能性が高まったことでも注目される。

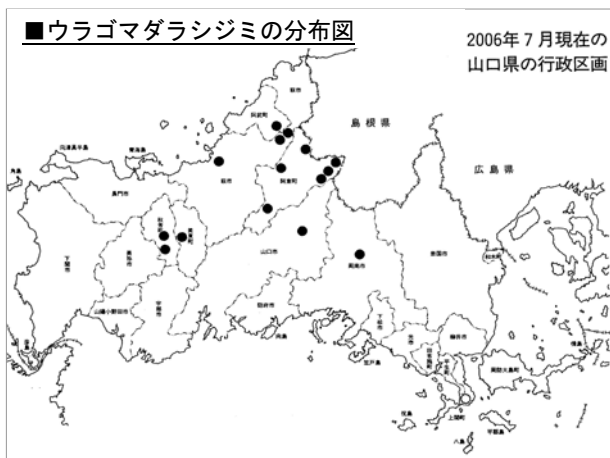
個体の比較見聞を行ったところ、内陸の既産地産に比べ大きさや斑紋(前翅、後翅とも)の大き

さや色彩に変化が見られることが判明した。岡山, 広島, 瀬戸内海側との個体の変異をまだ検していないが, 個体群として同様の形態にあるのではと推察している。但し四国産は黒化が強い。

この発見に伴い対岸の大島町（屋代島）の各山と上関の南（海）側になる長島も調べたが, 生息の可能性はあるものの未確認に終わった。分布調査は次年度以降も継続する予定である。



左上 阿東町産, 左下 秋芳町産, 右上下 皇座山産



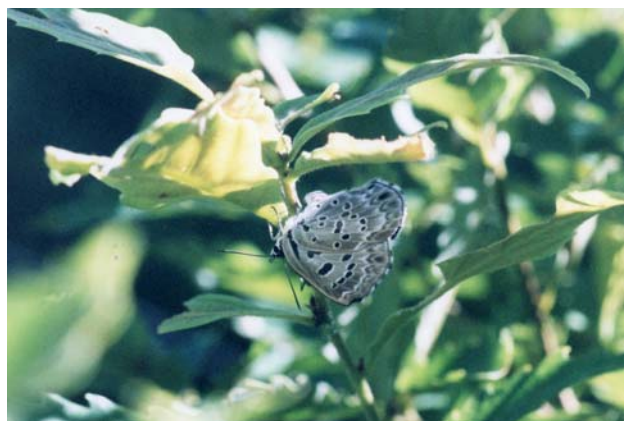
●印は既存の生息場所。○印は今回正式に報告した場所を表す。

・クロシジミ *Niphanda fusca* (Bremer & Grey, 1852)

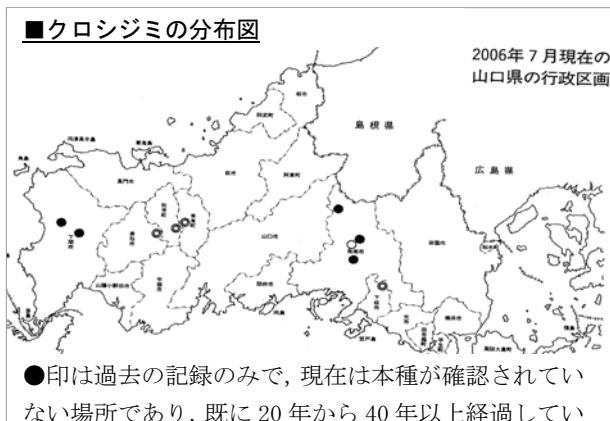
県内の内陸部の中央部に当たる周南市須々万奥から, 1970年代から発見していたとされるクロシジミの情報もたらされ調査した結果, 継続発生していることが判明した。本種は全国的に絶滅危惧種の上に該当する種で, 30年以上も継続発生していたことは管理面を含め特筆されることになる。県内の既産地でこの様な場所は下松に一箇所残されており, 個体数は少ないものの現在に至る。

共生する蝶類は県内では本種一種であり, 近県でも本種とキマダラルリツバメのみで, 開発の進んだ現代社会で, この様な特異な種の県内新発生地が示されたことに大いに注目している。

また当地の個体は白化の傾向が強いようで, 既産地との比較考察を行ってみたい。



クロシジミ産卵中



●印は過去の記録のみで, 現在は本種が確認されていない場所であり, 既に20年から40年以上経過している。◎印は現在も確実に発生をくり返している場所となる。○印は今回正式に報告した場所を表す。

2. 県内の分布域を更新している鱗翅目数種について

・シルビアシジミ

宇部市（旧楠町）内各所, 宇部市藤河内, 山口市（旧徳地町）, 柳井市伊陸など

・ウラナミジャノメ

宇部市（旧楠町）各所, 田布施町, 下松市, 柳井市平郡島など

・ミカドアゲハ

宇部市（旧楠町）各所, 下関市一之瀬など

- ・クロセセリ
柳井市平郡島（県内の島嶼からは屋代島に次ぐ記録となる）
- ・オオヒカゲ
岩国市（旧錦町）寂地峡（2005 年度も犬戻峡付近から採集されており生態調査を要す）
- ・サツマニシキ
下関市，岩国市（下関で複数個体採集（2003 年以降）．岩国市は初確認となる）

■番外編として

*クロボシセセリ

鹿児島県指宿市山川（2006 年度採集旅行中に発見した種で，本土初記録となる）

《第 8 回日本鱗翅学会中国支部総会議事録等》

議題及び結果は次のとおり．（議長：後藤支部長）

1. 2006 年度会計報告

事務局報告（中間報告）のとおりに承認された．

なお，次表は総会後の収支を含めた会計年度末時点での会計報告である．

2006 年度支部会計報告

2006. 12. 31. 現在

○収入の部

項 目	金 額	備 考
前年度繰越金	88,747 円	
2006 年度支部交付金	16,200 円	
2006 年度支部活動助成金	37,550 円	
寄付金（第 8 回支部例会余剰金）	32,000 円	
預金利子	3 円	
計	174,500 円	

○支出の部

項 目	金 額	備 考
第 8 回支部例会補填費	30,020 円	（18. 11. 25, 広島市, RCC 文化センター）
支部会報第 7 号印刷費	21,000 円	1 部 210 円×100 部
支部会報第 7 号ほか送料	16,740 円	案内状含む
事務消耗備品費	11,954 円	印刷用紙，インク，封筒など
雑費	1,727 円	例会時の写真
計	81,441 円	

○2007 年度繰越金

174,500 円－81,441 円＝ 93,059 円

2. 次期支部長の選出に係る意見聴取

支部長の後藤氏の評議員任期（1 期目）が 2006 年度で満了するが，後藤氏の支部長任期は 2006 年度末で 2 年であり，支部規約の解釈や次期支部長の選出について意見が分かれている．このため

次期支部長の選出にあたっての方向性を検討した。今後の支部運営の参考とする。

なお、意見を要約すると次のとおり。

- ①評議員任期と支部長任期の整合を図ること。
- ②支部規約を柔軟に解釈することで、現支部長の続投に何ら問題はないこと。
- ③支部規約の制定時の趣旨を曲げるべきでなく、新評議員のどちらかが次期支部長となること。
- ④支部規約第10条の改正を行い、支部長任期の柔軟性を高めること。

3. 2007年度支部役員の選出について

2006年度の体制を継続することが承認された。

4. 学会役員の紹介（敬称略）

中国地区の評議員は、先の選挙において、三宅誠治（岡山県）、淀江賢一郎（島根県）、後藤和夫（山口県）が選出された。

5. その他

出席者の一人から、本部での会合の折り支部経費の節減に努めるよう非公式に要請があった旨、報告された。

地方では施設や交通事情等が大都市圏よりも格段に悪く、経費節減に限界がある一方、支部行事の連絡などは極力電子メール等を活用することなど、支部としてもより一層の経費節減に努めるべきとの意見が交わされた。

【懇親会】18:00～20:00

総会終了後、別室に移り18時00分から懇親会が、ひろしま自然の会の守屋氏も加わり行われた。懇親会では参加者からそれぞれの近況などのコメントがあり、その後は各自が親睦を図った。

【終りに】

多大な時間と労力を費やして得られたデータをわかりやすくまとめて発表していただいた発表者の方々、タカネヒカゲの研究から“人類滅亡”まで興味深い考察をしてくださった広島大学・伊藤教授、会場手配や当日準備に奔走いただいた神垣広島県幹事をはじめ会員の皆様ほか関係各位に対し心より厚くお礼申し上げます。

お知らせとお願い

事務局

1. 支部助成金

支部会報第6号で報告した、2006年度分として本部へ申請済みの支部交付金については、会計報告のとおり入金がありました。

2. 会員名簿等の取扱いと経費の節減について

個人情報について慎重に取り扱わねばならない時勢に鑑み、第7号でお知らせしたとおり名簿の掲載を取りやめています。

しかし、事務局においては当然ながらこれまでどおり名簿管理をしていきます。また、情報伝達の迅速化や経費節減の観点から、電話番号や電子メールアドレス等の情報収集は引き続き進めたい

と考えておりますので、差し支えない範囲で各県幹事又は事務局へお知らせください。

連絡用書面の印刷、発送等の事務及び費用は意外とかなりの負担ですので、会員の皆様にも御理解と御協力をお願い致します。

3. 支部会報の原稿を募集しています

2008年3月に発行予定の支部会報第9号の原稿および表紙の写真を募集しています。
会員の皆様の近況等についてお知らせください。

4. 寄贈図書等の紹介及び支部保管リスト

これまでに寄贈を受けた又は支部で購入した図書として以下のものを保管しています。閲覧を希望される方は事務局までご連絡下さい。

No.	書籍名	発行年月	著者等	入手先	区分
1	レッドデータブックやまぐち	2002年 3月	山口県	山口むしの会	寄贈
2	山口のむし No.1	2002年 5月	山口むしの会	同左	寄贈
3	岡山県蝶類データ集	2002年 11月	三宅誠治		購入
4	山口のむし No.2	2003年 4月	山口むしの会	同左	寄贈
5	続・日本産蝶類文献目録	2003年 6月	白水 隆		購入
6	改訂・レッドデータブックひろしま	2004年 3月	広島県	中村慎吾氏	寄贈
7	山口のむし No.3	2004年 4月	山口むしの会	同左	寄贈
8	恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ	2004年 11月	委員長 難波 通孝	特別委員会	寄贈
9	山口のむし No.4	2005年 4月	山口むしの会	同左	寄贈
10	白水文庫その1	2004年 11月	おザキグリーン財団	同左	寄贈
11	ワンダフル・バタフライー不思議にみちたその世界	2005年 5月	本田計一・村上忠幸	本田計一氏	寄贈
12	チョウの生物学	2005年 8月	本田計一・加藤義臣(編)	本田計一氏	寄贈
13	恩原高原のウスイロヒョウモンモドキ(2)	2005年 11月	委員長 難波 通孝	特別委員会	寄贈

5. 第9回支部例会の開催について

今年の支部例会は下記の予定で準備を進めています。詳細は別途お知らせします。他の予定が入らないように、あらかじめお知らせしておきます。皆さん、ふるってご参加下さい。

- 日時：2007年11月17日(土)13時～
- 場所：岡山県倉敷市自然史博物館
- 参加費：会員500円、非会員1,000円

2007 年度中国支部役員連絡先

<u>支部長</u>	後藤 和夫	〒759-0207 山口県宇部市厚南 7 区平和町
	TEL : 0836-41-1164	
	FAX : 0836-41-1177	
		E-mail : kazumi-kgh46@h6.dion.ne.jp
<u>事務局幹事</u>	川元 裕	〒754-0014 山口県山口市小郡高砂町 8-32-406
		TEL : 083-972-8372
		E-mail : vagor@kind.ocn.ne.jp
<u>会計</u>	伊藤 靖子	〒758-0011 山口県萩市椿東 554-12
		TEL/ FAX : 0838-26-7155
		E-mail : RXW04042@nifty.ne.jp
<u>広島県幹事</u>	神垣 健司	〒737-0113 広島県呉市広横路 4-4-32
		TEL : 0823-74-2680
		E-mail : quercus77@mail.goo.ne.jp
<u>岡山県幹事</u>	吉田 嘉男	〒706-0304 岡山県玉野市番田 2810-1
		TEL : 0863-66-5334
		E-mail : jh4lix@po.harenet.ne.jp
		(ｼﾞｬｲ-ｴｲﾁ-4- <u>エル</u> -ｱｲ-ｴｯｸｽ-)
<u>島根県幹事</u>	淀江 賢一郎	〒690-0862 島根県松江市比津が丘 2-1-7
		TEL : 0852-26-0186
		E-mail : yodoe@mable.ne.jp
<u>鳥取県幹事</u>	田村 昭夫	〒682-0881 鳥取県倉吉市宮川町 2-74
		TEL : 0858-22-7707
		E-mail : tanbaya@lime.ocn.ne.jp

日本鱗翅学会中国支部規約

(2001年12月2日制定)

(2005年11月26日改正)

第1章 総 則

- (名称)
第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。
- (目的)
第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。
- (事務局)
第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。
- (事業)
第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。
(1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
(2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
(3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区（広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県）に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所（連絡先）、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1) 支部長 1名
- (2) 事務局幹事 1名
- (3) 幹事 4名
- (4) 会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。

幹事（事務局幹事を含む）は第5条の各県の会員の中から推薦され（1名ずつ選出。自薦を含む）、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。

事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。

会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度内の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。

事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。

幹事（事務局幹事を含む）は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。

会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。

事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。

幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。

会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。

例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。

総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。

総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。

会報は事務局が発行し、例会開催翌年の4月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費（本部より交付） 200円/年/会員
- (2) 支部助成金（本部に申請）
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補 則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附 則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

附 則

この規約は、平成18年1月1日から実施する。

(支部例会について：第4回支部総会申合せ事項)

例会参加費

- 2003年から、学会員500円、非学会員1,000円とする。
- 参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。
- 総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

<編集後記>

ようやく鮮やかに緑目覚める季節がやってきました！

とはいえこの冬は、私が積雪を見かけたのは僅か数回という記録的な暖冬でした。長野県をはじめ統計開始以来最少、平均気温は平年より2～3度程度高かったそうです。

その影響は動植物に大きな影響を与えたようで、冬眠しないツキノワグマや農作物の豊作などが報道されています。身近なところでは、冬蛾と春蛾が一緒に発生していることも知人から知らされました。彼曰く「冬蛾がいつ羽化しようかと迷っているうちに春蛾が羽化し始めた、という感じだそうです。しかし、一転、3月は冬型に戻り慌てて灯油を買い足しに走ったりもしました。

おかげで職場でも異常気象と地球温暖化がよく話題に上ります。私は地球規模のダイナミックな気候変動については論じる知識、技量は持ち合わせていないので、あまり考えないようにしていますが、せめて身近な昆虫や植物の経年変化を肌で感じ、記憶して、今後の自分の生活の見直しに役立てようと思います。このたびの暖冬による昆虫の発生への影響も注視したいところです。

日本鱗翅学会中国支部会報
第8号

発行日：2007年（平成19年）4月 3日

編集者：川元 裕

発行人：後藤 和夫

発行者：日本鱗翅学会中国支部